



みんなの趣味の園芸

# 植物園日記

2









2011年4月～  
2012年3月

新潟県立植物園

## 目次







### 春

#### 2011年

-  4月11日 フローリアンが咲いた … 5
-  4月15日 激レア！ユキバタツバキ … 8
-  4月17日 ヒスイカズラとコウモリ … 12
-  4月24日 霧島のキリシマ … 15
-  4月30日 ちょっとだけクロフネツツジ … 20
-  5月6日 クロフネツツジ 2 … 24
-  5月19日 行って納得！能登のキリシマツツジ … 27
-  6月8日 サツキの花は最先端 1 … 31

### 夏

#### 2011年

-  7月5日 サツキの花は最先端 2  
ツイッターもはじめました … 35
-  7月10日 ヒメサユリの花 友の会の観察会 … 38
-  7月23日 新説！セイシカの名の由来 1 … 41
-  7月26日 新説！セイシカの名の由来 2 … 44
-  7月28日 高城山の夏の花 … 47
-  8月10日 納得！ユキヤナギの品種名 … 50

# 目次

- 🌱 8月14日 みんな大好き笹だんご … 53
- 🌱 8月16日 セイシカの名の由来 3 … 56
- 🌱 8月26日 電子書籍ができました！ … 59
- 🌱 9月2日 ちょっと興奮アサザの花 … 61

## 秋

2011年

- 🌱 11月22日 琵琶湖周航の歌の謎 … 66
- 🌱 11月25日 琵琶湖周航の歌の謎 2 … 70
- 🌱 11月29日 ドイツで見た植物 1 … 75
- 🌱 11月30日 ドイツで見た植物 2 … 79
- 🌱 書き下ろし ドイツで見た植物 3 … 82

## 冬

2012年

- 🌱 1月18日 どんぐりの根 … 89
- 🌱 2月4日 大雪警報!! … 93
- 🌱 書き下ろし 今年度の十大ニュースと  
クリスマスローズ … 98
- 最後の「後から長い一言」 … 102

春





## フローリアンが咲いた

4月13日から開催されるシャクナゲ・ツツジ展の準備の追い込み中です。実は担当なのですが、何もしていない植物園日記担当の倉重です。今回はシャクナゲとバラの饗宴と言うテーマですので、皆さんお楽しみに。

4月11日

### 今日の話51

## フローリアンが咲いた！ ファンタジスタ集合

11月23日の園芸日記等でお知らせしてきましたが、4月1日にやっと最初のフリージア‘フローリアン’が咲きました。

3月12日に予定していた「ファンタジーin新潟県立植物園～ジョン・レノンゆかりのフリージアを育てよう～」は地震のために中止になりましたが、今日は5名のファンタジスタ、千葉県のチャリダー☆かつさんとLin Dioさん、東京の白うさぎ7さん、埼玉のいちごよしおさん、本県代表のすずめさんが植物園に集合しました。こう書くと変な人の集まりのように思えますが、皆さんハンドルネームですので念のため。

温室内では黄色八重の‘フローリアン’の花も開きはじめ、満開の他の品種も合わせて数百株のフリージアが開花して、良い香りにつつまれています。「みんなの夢ボード」にも数百枚の皆さんの夢を書いたカードが張られています。ファンタジスタもまずはひとしきり見学して、写真撮影。

その後、温室を見て回りましたが、今回は蜜の味見大会になりました。



まずは西洋シャクナゲ、品種によってだいぶ甘さや濃さが違います。前にも書きましたが、斑点(ブロッチ)のある一番上の花卉の基部にだけ蜜がたまっています。

次はセンナリバナナ。夕方に苞が開いて花が露出した時になめたらほのかに甘かったのですが、苞が開く前は苦いような味がして、ほとんど甘味を感じません。全然おいしくなかった。

それからニューギニア原産のビレアシャクナゲ (*Rhododendron gardenia*)。コウモリが受粉者なのですが、西洋シャクナゲよりもずっと濃厚で甘い蜜を大量に出しています。誰かがホットケーキにつけたいと言っていたのですが、これが一番うまかった。

最後は咲きはじめてヒスイカズラで花粉の出る仕組みを勉強してから、また味見。まあまあの味でした。

今日は植物の勉強をしながら、仲間と楽しいひと時を過ごしました。来年もダブルファンタジープロジェクトのイベントを企画しますので、皆さん是非お越しください。

## 後から長い一言

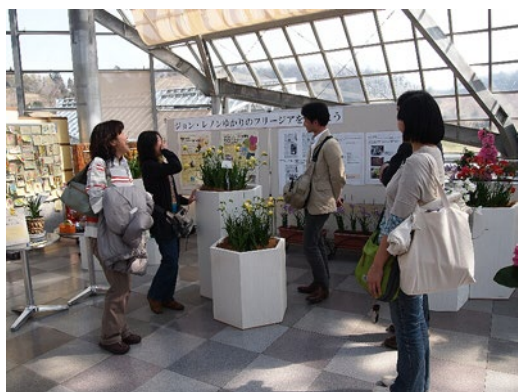
ダブルファンタジープロジェクトについては、パプーで公開している昨年度の植物園日記の電子書籍をご覧ください。無料でダウンロードできます。

<http://p.booklog.jp/book/32962>





ジョン・レノンゆかりのフリージア‘フローリアン’（左）と一緒に展示したフリージア。温室が甘い香りにつつまれる



全国からファンタジスタが大集合。‘フローリアン’の前で話がはずむ



数百の夢が書かれた「みんなの夢ボード」



# 激レア！ユキバタツバキ

あ～、こんなタイトルしか思い浮かばない。修行が足りない  
植物園日記担当の倉重です。

今年度からは始める「植物園花散歩」で花と緑の教室がパ  
ワーアップします。園内や温室の見所をめくりながら、解説を  
聞クツアーです。第一回は不肖私めがつとめます。一回も  
やったことはないけど多分楽しいですよ。皆様ぜひご参加く  
ださい。

さて、温室担当Hが異動してしまったので、新担当H2号の  
キャラ設定をしています、これが難航しています。

「どんな感じがいいかな？ 語尾を、ですわ。はどう？」、  
「今時そんなことを言う人はいませんよ」、「そうかな」

「だっちは？」、「ありえない！」、「なんとかだピオンは？」、  
「……」

「わたし、ハイジみたいのがいいです！」(担当H2号の発  
言)、「アルプスのハイジ？どんなのか分からないけど」、  
「じゃいいです」

ジェネレーションギャップも感じつつ、議論は果てしなく続  
くのでした。

4月15日

今日の話題52

## ユキバタツバキが咲いた

このところの暖かさで、先週は咲いていなかったユキバタツ  
バキが開花しました。植物園付近の林にたくさん自生してい  
ます。





ユキバタツバキってあまり聞き慣れない名前だと思いますが、まずは、基本的なヤブツバキとユキツバキの違いから。文章では分かりにくいので、以下の説明と画像をご覧ください。

#### ヤブツバキ — ユキツバキ

- 青森以西に分布 — 本州北部の日本海側の多雪地帯に分布
- 樹高15mで幹は太くなる — 樹高3mほどで幹は多数で太くならない
- 葉の鋸歯はまばらで、とがらない — 鋸歯は細かく、先は尖ってトゲ状になる
- 花は筒形で、花弁は厚い — 花は広く開き、花弁は薄い
- 雄しべ(花糸)は白色、基部で合着し、筒をつくる — 雄しべは黄色で合着するが、筒はごく短い

元新潟大学教授の石沢進先生の研究によると、最深積雪量が1.5m以下の地域にはユキツバキは分布しないとの由。新潟に生えるのは全部ユキツバキかと思っていましたが、雪の深くない沿海域にはヤブツバキが生えているんですね。

さて、ヤブツバキとユキツバキの分布域の間、当園の場所もそうなのですが中途半端に雪が積もる地域に生えるのが、両種の間間的な形質を持つユキバタツバキです。漢字で書くと「雪端」なんでしょうね。

近くの山でユキバタツバキを観察すると、紅を基調として花色さまざま、雄しべの筒の長さもさまざまです。しかし、花は開いて咲きますので、一見するとユキツバキです。変化に富んだ花は、群生地で見ると本当にきれいです。

当園にお越しの際には、近くの山で咲いているユキバタツバキを是非ご覧ください。



## 後から長い一言

「日本の野生植物」(平凡社)に拠れば、ヤブツバキの開花期は11～12月、2～4月とありますので、厳冬期を除いた冬に開花すると言うことでしょうか。ユキツバキは冬の間雪に埋もれていますので、開花期は春4～5月です。

ユキバタツバキは分布が限られているので、ほとんど栽培されていません。私も新潟に来てはじめて見ました。

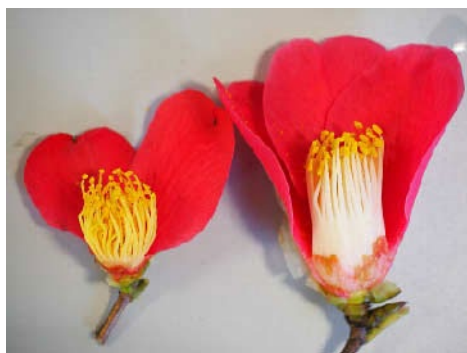
ツバキの見分け方なのですが、説明はあくまでも野生種のことですので、国内外の野生種や園芸品種が交配親に使われている園芸品種には当てはまらない場合が多いことを申し添えておきます。

茶花として人気の高い古品種である侘助の系統(‘有楽’または‘太郎冠者’とも呼ばれる)は、近年の研究で、ヤブツバキと中国産のツバキとの雑種であることが明らかになっています。





ユキツバキとユキバタツバキは花があまり開かない



左のユキツバキは雄しべ(葯と花糸)が黄色く、それぞればらばらだが、ヤブツバキは雄しべ(花糸)が黄色く、基部で合着して筒状になる



左からユキツバキ、ユキバタツバキ、ヤブツバキ  
ユキツバキの鋸歯は細かく、先は尖ってトゲ状になるが、ヤブツバキの鋸歯はまばらで、とがらない



# ヒスイカズラとコウモリ

咲きはじめましたヒスイカズラ。

先日ダブルファンタジープロジェクトの集まりがあったのですが、その時にヒスイカズラの受粉の説明をしたら、大いに受けましたので、気を良くして今回はこの話を。今日もヒスイカズラの受粉の仕組みを観賞中のお客さんに無理やり説明してしまった植物園日記担当の倉重です。

4月17日

## 今日の話53

### ヒスイカズラの受粉

いや～。実物を見れば分かるのですが、写真と文章で説明するのは難しいことが判明しました。面白さが伝わるかどうか。

ヒスイカズラはフィリピンに自生するマメ科の藤本(「ふじもと」ではなく「とうほん」、つる性の木本植物)です。自生地ではコウモリが花粉を運ぶとされます。昨年の温室担当Hが交配した時の結実率(0.67%)からみて、基本的に他の株の花粉でないと結実しない他家受粉する植物のようです。

ヒスイカズラの花は、3つのパートに分かれています。上の部分を旗弁きべん、真ん中の小さな部分が翼弁よくべん、下を竜骨弁りゅうこつべんと言います。

コウモリは花房にぶら下がり、花の奥にある蜜を吸うために口(舌かな?)を突っ込みます。そうすると翼弁と竜骨弁が押されて動いて、竜骨弁の先から雄しべ(花粉)が出てきます。



分かりにくいので、写真をご覧ください。ちょうどコウモリの頭の後ろにつくんでしょね。蜜を提供するかわりに自分の花粉を他の花に運ばせると言う、ギブ・アンド・テイクの関係を築いています。

実は花粉が出る時に雌しべも一緒に出ているのですが、雌しべの先には、こすれると取れるキャップ状の覆いがありますので、最初のコウモリが訪れたときには花粉がついても受精しません。頭に花粉をつけた次のコウモリが花を訪れ、キャップの取れた雌しべに花粉がつくとはじめて受精します。

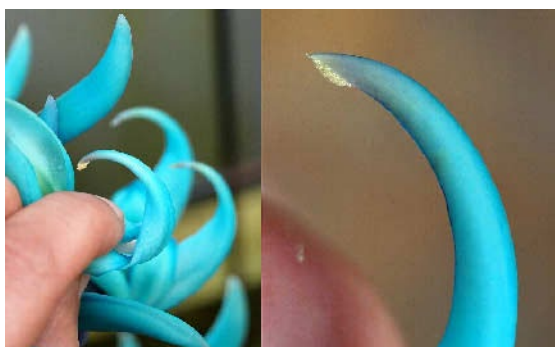
フジなども、同じような仕組みで花粉を昆虫に運ばせています。ハチなんかだと逆さにぶら下がりませんので、花粉は腹につくんでしょね。

本当に植物と動物の関係は驚きに満ちています。

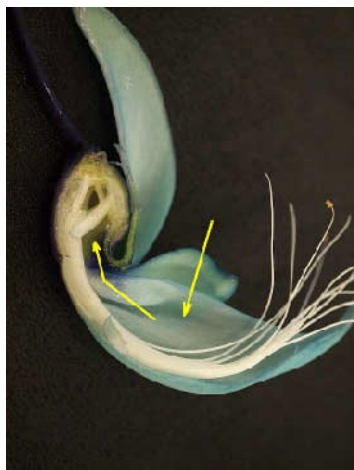




ヒスイカズラの花は3つの部分から構成される。上から旗弁、きべん、  
よくべん 小さな翼弁、りゅうこつべん 竜骨弁



コウモリが蜜を吸うために花に舌を突っ込むと、翼弁と竜骨弁が押されて、竜骨弁の先から雄しべ(花粉)が出る



花の断面。矢印はコウモリの舌が入る経路

# 霧島のキリシマ



日曜日は植物園友の会の総会で、「にいがた花の園芸史」の演題で話をしまして、そのまま東京へ。翌朝、羽田から鹿児島。月曜日から水曜日まで霧島市と宮崎県のえびの市でツツジの調査をしました。木曜日午前は第一回目の植物園花散歩、午後は五泉市での講演と、ちょっとお疲れモードの植物園日記担当の倉重です。

4月24日

今日の話題54

## 霧島のキリシマ

今回は江戸時代に最も尊ばれた深紅のツツジ‘本霧島’の調査に鹿児島と宮崎に行ってきました。目も覚めるような赤は今見ても非常に鮮烈な印象を受けますので、江戸時代に高く評価されたこともうなずけます。最高のツツジですね。比較のため全国各地の古木を探していますので、情報があれば是非お知らせください。

さて、古文の勉強のようで恐縮ですが、以下の記録が‘本霧島’（かつては単に霧島と呼ばれていた）の起源について書かれたものです。

「続江戸砂子」菊岡沾涼 1735 享保20年

「霧島は薩摩国霧島山の産木なれば此名あり。正保年中、薩州より大阪へ一本来る。取木にわけて大阪より五本、京都に登る。号て富士山、鱗角、面向、無三、唐松と呼。富士山、鱗角の



二種は、禁廷に植させられたり。残る三種は、明暦二申年(1656)、武江染井に下す。それより接木指枝として、數品にわかれて諸州に樹る。三種の元木、今に存す。面向(高尙丈(3.03m)、はばり一丈、根まはり二尺九寸(88cm))、無三(高一丈三尺(3.9m)、はばり丈二尺(3.6m)、根まはり二尺三寸(70cm))、唐松(高一丈二尺(3.6m)、はばり一丈二尺(3.6m)、根まはり二尺五寸(76cm))。いつれも紅花也。今は古木となりて、春毎に花開て猶色ふかし」

※括弧内は筆者が加筆

「本朝諸国風土記」津田敬順 1789～1801 寛政年間

「今東武にもてはやすキリシマといふ花あり。寛文年間藤堂和泉守、薩州霧島山より取よせて秘藏し、後々多く取よせて染井の下屋敷に植てより、染井の里植木や伊兵衛といひしもの接木にし又刺木にせしより今東武に沢山にはなりぬ。元来、霧島ヶ嶽にありし花ゆへにきりしまと呼べり。花の大き成を琉球といふも、元来薩州より渡り来れる名なれば也」

## 後から長い一言

「続江戸砂子」の要点をまとめました。

霧島(‘本霧島’)は霧島山の産であるためこう呼ばれる。江戸時代初期正保年間(1644～1648)に薩摩の霧島山から1株が大阪に運ばれた。そこで、取木で5本にふやされ、2株は京都の御所に、3株は明暦2年(1656)に江戸の染井(現在の東京都豊島区)に下った。その株から接木やさし木でふやされ、





いくつかの園芸品種もできて、諸国に広まった。今は(1735)、3株は古木となって春毎に花を咲かせている。

その次にあげた「本朝諸国風土記」では、藤堂和泉守が寛文年間(1661～1673)に霧島山よりキリシマツツジ(‘本霧島’)を取り寄せ、染井の下屋敷に植えた。植木屋の伊兵衛がこれを接木やさし木でふやして、江戸に広まった。とあります。

江戸に入った年代や経緯が資料によって多少違いますが、1660年前後に‘本霧島’が江戸に移入され、その後ふやされて広まったことは共通しています。この植木屋が江戸随一と言われ、自らを霧島屋伊兵衛と名乗り、世界初のツツジの解説書「錦繡枕」(1692)を著した伊藤伊兵衛です。う～ん、江戸350年の時を超えて現在までこの品種が全国各地に残っているのはすばらしいことですね。

さて、‘本霧島’が江戸に入ってから150年後の記録を見ていきましょう。

1818年の「<sup>やっこだこ</sup>奴師勞之」(太田南畝)には、3株の元株は染井の伊藤伊兵衛の庭からなくなっていたと書かれています。

「染井の植木家伊兵衛がもとに、享保の頃拝領せしといふ躑躅の大きなるが三本あり。面向、無三、唐松といふ木なり。其のち尋ね見れば、其木もいづちゆきけん、みえず。伊兵衛は地錦抄つくりしものなりしが、子孫おとろへて植木もすくなし」

さらに1827年の「江戸名所花暦」(岡山鳥編)には、大久保(東京都新宿区)にキリシマツツジの大木があることが書かれています。

「躑躅 きりしま さつき 大久保百人町 四谷大久保武家家地の園中すへてあり。就中組屋敷を北のかたへ出る門より二、



三軒手まへ右のかた、飯島氏の園中に多し。殊に勝れたる映山紅(つつじ)の大樹あり。この花、八十八夜の頃盛なり」

これらの記録からツツジ栽培の中心は19世紀はじめには、大久保(東京都新宿区)に移ったことが分かります。ブラタモリでやっていた鉄砲百人組が内職でツツジを栽培していたのもこのころからだと思います。そして、明治になると大久保のツツジは近代的な西洋式の公園、日比谷公園などに移植され、また大正時代には群馬県館林市のつつじが岡公園(新公園部分)などに移されていったのです。





江戸時代を代表する深紅のツツジ  
‘本霧島’



霧島市に残る‘本霧島’の古木



おこびら  
宮崎市えびの市大河平の古木群



## ちょっとだけクロフネツツジ

昨日は休みなのに、間違えて出勤した植物園記担当の倉重です。弁当を持って行ったので昼まで仕事をして帰りました。

先日お知らせした4月24日の魚沼市の魚沼市生物多様性シンポジウムは130名ほどの参加者があって大成功でした。かたい内容にもかかわらず魚沼市民は植物の保全への意識が高いですね。新潟日報でも紹介されました。

さて、新潟でもソメイヨシノの花が終わりましたが、今日園内を歩いてみるとチューリップ、アイノコレンギョウ‘リンウッド’、ジューンベリーなどの春の花が満開でした。これから、ツツジやボタンなども咲いてきますし、新緑も美しい時期になります。

さて、今日見た中からいくつかご紹介します。宿根草花壇のマグノリア・ソウランギアナ‘アレクサンドリナ’。花の内側と外側の色の対比が美しいですね。似た花色ですが、もっとふくよかな花を咲かせる品種に‘福寿’があります。これは埼玉の中村農園さん作出の品種です。

そして、マグノリアの最高峰‘サヨナラ’。花が丸くて、でかい。アメリカのグレスハム博士の交配です。名前も良いし、花卉の基部の赤色が色っぽいですね。甘く香ります。

ちょっと前にはツツジ園でシデコブシも開花していました。愛知、岐阜、三重にだけ自生する貴重なモクレンの仲間です。川沿いに生えていて、花色も白からピンクまで変化があります。最近は花色の濃い園芸品種が植栽されているのを見かけます。大きくならないので庭植えに良いのでしょうね。20年位前にイギリス王立園芸協会のウイズレーガーデンの



園長ジム・ガーディナーと自生地を訪ねたのを思い出しました。  
ジムはマグノリアのスペシャリストです。

## 今日の話題55

### クロフネツツジ

クロフネツツジは日本には自生がなく、朝鮮半島、中国、ロシアに分布する落葉性のツツジです。大鉢に植えた株を温室の入口に展示しているのですが、職員がお客様から名前の由来を聞かれたそうです。と言うことで、ちょっと調べました。

あ〜、文字数が超過しそうなので、名前の由来は次回に。

#### 後から長い一言

モクレンの仲間(モクレン属)の野生種、園芸品種を総称して、最近では学名のマグノリア(*Magnolia*)と呼ぶことが多くなりました。これは近年さまざまな種類のモクレンの仲間が導入されたためだと思います。英名もマグノリアで、学名と同じです。

植物の名称は、専門分野によって違うことがあったり、流通名があったり、時代によって変わったりするので、厄介ですね。私はハーブの名前が分からなくて。サルビアがハーブの世界ではセージと言うことにもいまだに慣れません。そのために世



界共通の名称である学名があるんですね。

例えば、ハーブのクラリーセージも学名は*Salvia sclarea*ですので、植物を専門にしている人は、学名を聞けばすぐにサルビア(アキギリ属)だと分かります。

くじらさんからコメントをいただいた別名の「アメジストセージ」を調べてみましたが、英名ではないようです。日本独自の呼び方かもしれません。英名はメキシカンブッシュセージで、日本で普及しはじめたときはこの名前と呼ばれていました。またサルビア・レウカンサとも呼ばれますが、これは学名です。このように同じ植物が違う名前と呼ばれることはしばしばあります。

変わると言えば、現在は植物の分類体系もDNAの解析に基づいた見直しが行われていますので、これも普及するまでに時間がかかるでしょうし、多少の混乱を引き起こすだろうと思います。今までの分類では、カエデの仲間はカエデ科だったのですが、最近はムクロジ科に含まれています。





朝鮮半島、中国、ロシアに分布する  
クロフネツジ



花が大きく、ふくよかなマグノリア  
‘サヨナラ’



マグノリア・ソウランギアナ  
‘アレクサンドリナ’



## クロフネツツジ 2

ネタはあれども、書くのが追いつかず。そんな日々を実感している植物園日記担当の倉重です。5月4日、5日は植物園まつりを開催し、晴天に恵まれて多くのお客様でにぎわいました。私もバックヤードツアーを担当しました。

5月6日

今日の話題56

### クロフネツツジの名前の由来

先回のクロフネツツジの名前についてのお話の続きです。クロフネツツジは日本に自生しませんので、私は昔に別の名前と呼ばれていたのが、ペリーの黒船来航の時にでも「外国から来た」の意味でクロフネツツジと呼ばれるようになったのかなと漠然と思っていました。

しかし。

調べてみると意外や意外、クロフネツツジは古い名前であることが分かりました。まず勘違いしていたのが、「黒船」という言葉です。ペリーの黒船だけではなく、江戸時代よりも前から和船や中国船には見られない、黒塗りの西欧の帆船を黒船と呼んだそうです。黒いのはピッチと呼ばれる防水のための樹脂が塗られているからだそうです。知らなかった～。

江戸の園芸家、伊藤伊兵衛の「地錦抄附録」(1733)には「寛文中渡ル品々 黒船つつじ」とあります。寛文(1661～1673)から延宝年間(～1681)は、ツツジが大流行した時期ですので、ちょうどこのころに渡来したことになります。鎖



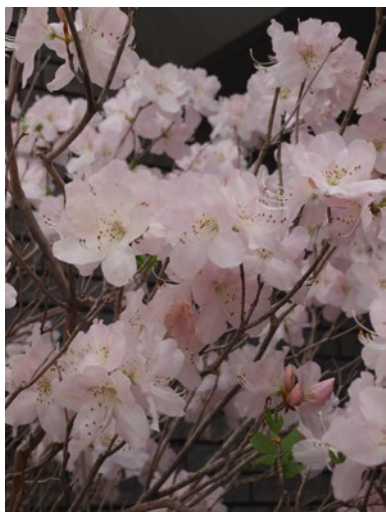


国は寛永16年(1639)からはじまりましたので、黒船であればオランダ船でしょうか。クロフネツツジは朝鮮半島、ロシアに分布しますので、本当に黒船に載せられてきたのか、単に外国産と言う意味なのかは判然としません。

調べた限りでは、最も古いクロフネツツジの記述は「錦繡枕」(1692)にある「くろふね からのつつじ」でした。「花壇地錦抄」(1695)には「くろふね さくらいろ大りんからのつつじ也」(くろふね 桜色、大輪、唐のつつじ也)とあります。

西洋にクロフネツツジがはじめて導入されたのは1893年。有名なイギリスのヴィーチ商会のジョン・ハーヴァード・ヴィーチ(1868～1907)が日本の庭園で採取したものでした。日本に渡来してから100年以上が経っています。ウィルソンの「モノグラフ・オブ・アザレア」(1921)には、日本では古くからクロフネツツジと呼ばれるとありました。





英名ではロイヤル・アザレアと呼ばれるのにふさわしい上品なピンクの花を咲かせるクロフネツツジ



日記とは関係がありませんが、ちょうど咲いていたボルネオのビレアシャクナゲ(有鱗片シャクナゲ)ステノフィラム (*Rhododendron stenophyllum*)



開催中のシャクナゲ展の様子



# 行って納得！能登のキシマツツジ

異動になった温室担当Hが昨日来園して、なぜか「キャッチコピーが面白いほど書ける バカ売れキーワード1000」と言う本を置いていってくれました。

その本のキャッチコピーがすごい「あてはめるだけ！」。こんな便利な本があるなんて、もう悩まなくてすむと安心している植物園日記担当の倉重です。と言うことで、パラパラとめくって、目についたのが今回のタイトルです。この本のもう一つのキャッチコピーが、「お金をかけずに飛ぶように売れていく」ともありますので、これで注目度アップ間違いなしでしょう。

さて、本題です。5月8日から10日にかけて能登行ってきました。今年は開花が遅れていて、まだほとんど咲いていませんでしたが、今回は能登のツツジをご紹介します。

## 今日の話57

### のとキシマツツジ

ツツジの園芸品種‘本霧島’は、かつては単に「霧島」と呼ばれていました。これは、このツツジが霧島山から大阪経由で江戸に正保年間(1644～1648)に移入されたためです。江戸では植木屋の伊藤伊兵衛が増殖し、江戸から全国に広がったため、類似品種を含めて江戸キシマ系ツツジと呼んでいます。江戸時代にはこの深紅の‘本霧島’が最も高く評価されていました。



私たちの調査の結果、石川県の能登半島には樹齢100年以上の江戸キリシマ系ツツジの古木が300株以上残っており、数多くの品種があることが分かってきました。地域ではこれらを「のとキリシマツツジ」と呼んで保護し、オープンガーデンで公開(5月22日まで)しています。お近くの方は是非どうぞ。

さて、能登の古木を紹介しましょう。

写真の株はすでになくなってしまいましたが、輪島市赤崎にある石川県天然記念物‘本霧島’。1923年の三好学先生(東大教授)の調査で、1株で樹高9m、枝張11mの大きさであったと記録されています。嘉永6年(1853)に、加賀藩主前田斉泰公がご覧になった由緒のある、記録に残る能登最大の個体です。

次が珠洲市大谷 池上家の‘本霧島’。これも県天然記念物に指定されています。樹高4m、枝張5mで、3株植えられています。これが現存する能登最大の‘本霧島’です。

それと非常に珍しい‘紫霧島’。能登町五十里の酒井家の所有で、石川県天然記念物です。「錦繡枕」(1692)にあげられている古い品種ですが、日本に大きな木は10本もないのではないかと思います。

## 後から長い一言

私も仕事柄ツツジはずいぶん見ましたが、のとキリシマツツジは本当に大きくて圧倒されます。のとキリシマツツジの調査や保存について、能登町広報誌のインタビューを受けた記事



が能登町のHPにアップされています。ちょっと重いのですが、よろしければご覧ください。

<http://www.town.noto.lg.jp/open/prnoto/0000001661.pdf>

オープンガーデンと言うと庭を見せるために花を植える場合が多いと思いますが、能登の場合は、キリシマツツジも含めて、昔から守られてきた庭を公開しています。のとキリシマツツジの深紅の花、裏山とそこに植えられた深い緑のアテ(アスナロ)の林、古民家の白壁と黒い瓦等々が一体となって雰囲気をかもしだしています。

のとキリシマツツジオープンガーデン情報

<http://www.okunoto-ishikawa.net/modules/notoiro/>





大正12年の天然記念物調査の際に撮影された  
樹高9mの‘本霧島’



現在残る能登最大の‘本霧島’  
(珠洲市大谷)



日本に古木は10株残っているか？非常に珍しい‘紫霧島’。枝が横に張るので樹高は低い、根元を見ると相当の古木であることが分かる



# サツキの花は最先端 1

5月の園芸日記の更新はたったの2回！花は咲くし、イベントも多いのに、こんな時期に限って最少不倒回数を達成してしまった植物園日記担当の倉重です。

5月には名古屋で開催された日本植物園協会の総会・大会に出席してきました。植物園がこの「みんなの趣味の園芸」のサイトに参加したのは、去年の総会で水戸植物公園の西川園長の発案があったからでした。一年あつというまでですね。

さて、久しぶりに何を書こうか広報担当のOに相談したら、「も一何を言ってるんですか！グリーンカーテン！6月からじまった企画展のどうぶつのいない動物園！にいつ花ふるフェスタ！いくらでもあるじゃないですか！」と叱咤されました。ハイ、お言葉に素直にしたがいます。

まずは自称日本最大の木造グリーンカーテンのトンネル。温室前で幅5m、長さ18mと威容を誇っています。専門学校の学生さんの協力でトントントン、あつと言う間にできていました。バックヤードでゴーヤのタネもまきましたので、夏には園内に涼しい空間ができると思います。

さて次。今回の企画展示は「どうぶつのいない動物園」。内容は、あー、説明すると長くなりますのでホームページをご覧ください。

<http://botanical.greenery-niigata.or.jp/tenji/index.htm-1#...>

そして5日には「にいつ花ふるフェスタ」が行われました。にいつ食の陣も出展し、地元で売り出し中のプチベール（芽キャベツとケールを交配してできた野菜）を使った「にい



「つバーガー」や、これも新津名物の三色団子のプチベール入りのスペシャル等々の販売、ステージでのコンサートが行われました。あまりにも人が多くて、にいつバーガーが食べられなかったのがとても心残りです。

## 今日の話題58

### サツキの花は最先端 1

6月2日にサツキ展の審査に行ってきました。毎回思うのですが、サツキの品種改良はツツジ属の最先端を行っていますね。

能書きは次回に譲るとして、まずは今回見たちょっと変わったサツキの花を写真で紹介しましょう。

‘はなびん’、切れ弁、八重の絞り咲き。大輪の‘傘の雪’。これは昔のベルギーのアザレアの品種にそっくりです。‘緋の鳥’。きりりとした花形と赤い絞りの花はサツキらしいですね。

この話題次回に続く。







‘はなびん’ 切れ弁、八重の絞り咲き



‘緋の鳥’ きりりとした花形と赤い絞りの花



大輪の‘傘の雪’ 100年以上前のベルギーのアザレアにそっくり

夏





## サツキの花は最先端 2 ツイッターもはじめました

もう日記を書くのをやめたのではないかと思っていた向きもいらっしゃるでしょうが、まだ植物園日記を担当している倉重です。

まずは重要なお知らせです。この植物園日記はどちらかと言うと能書きが多くて、タイムリーに情報を発信することができませんでした。そこで困ったときの他力本願。即時に情報を発信することができるツイッターをはじめました。

@Niigata\_BGardenで検索してご覧ください。登録していなくてもご覧いただけますし、登録されている方はフォローを是非お願い申し上げます。

今日の話題59

### サツキの花は最先端 2

もうサツキの花は終わってしまって、書いても書かなくても良い感じがしますが、サツキの品種改良のお話の続きです。

ツツジは江戸時代から多数の品種が作出されたため、似た品種をグルーピングしてクルメツツジや平戸ツツジなどと呼ぶことがあります。これを品種群と言います。サツキも一般に「サツキ」と言う場合は、サツキの野生種だけではなく、園芸品種も含んだ品種群を指していることが多いと思います。

サツキ品種群は、江戸時代には本州と屋久島に自生するサツキと九州に分布するマルバサツキの野生種、それらの突然



変異個体(変わり物)や交雑種から構成されていましたが、現在は「これもサツキですかあ?」と思わず言ってしまうものも数多くあります。

さて、近代のサツキの流行は明治30年ごろからで、これ以降に盆栽としても観賞されるようになったことから、現在まで数多くの趣味家を虜にしてきました。この厚い層に支えられて、毎年新品種が発表されています。

しかし、ある程度品種改良が進むと同じような花ばかりしか出ないのでしょうか。節操もないと言えばそれまでですが、飽くなき追求のもと、昭和初期には大輪系サツキを育成するためにアザレアが交配親に使われました。先日の展示会で見た中では、ミヤマキリシマなども交配親に使われているようです。サツキのすごさは、単に他の種類と交配しただけではなく、古くからあるサツキと同じように咲き分けなど素晴らしい芸を持つまでに改良されていることです。

最近のサツキを見ると、6弁の花が多いなと思いました(普通は5弁)。サツキは花弁が細長いのが一つの特徴ですが、その姿をとどめながらも、6弁になることでより豪華に花を見せています。写真の‘明日香’は良い見本で、咲き分けするのも素晴らしい特徴ですね。‘夢姉妹’は丸弁で、黄緑の地色に明るい朱色の絞りが入る花は上品な印象がします。絞りの入り方が異なるのが‘祝星’です。これも今までのサツキにはない花ですね。





6弁の花を咲かせる‘明日香’



‘夢姉妹’は丸弁で、黄緑の地色が珍しい



絞りの入り方が特異的な‘祝星’

# ヒメサユリの花 友の会の観察会



あ〜これも時期外れの話題！時間を超越した植物園日記担当の倉重です。6月12日に植物園友の会の観察会で、三条市高城山のヒメサユリの自生地に行ってきました。

高城はヒメサユリの大群生地として有名で、花の時期には「越後三条高城ヒメサユリ祭り」が開催され、多くの人を訪れます。

## 今日の話題60

### 高城山の植物

たかじょう

高城の名は、下田地域を支配した長尾豊景が1426年に築城した城名にちなみます。麓の長禅寺から山頂(370m)まで普通1時間ほどですが、途中解説と言うか、話をしながら登ったら、3時間もかかってしまいました。

ちょうどヤマボウシの開花期で、きれいな白い花がたくさん見られました。最近は庭木としても人気がありますね。群馬の榛名山で、花(苞)が赤い個体を見たことがあります。こういう中から赤花の‘サトミ’が選抜されたんでしょうね。山頂ではエゴノキが満開で、虫がブンブン飛んできて、花に集まっています。初夏に咲くのは白い花が多いような気がします。

途中で見た新潟らしい植物を写真と共にご紹介しましょう。

まずはヒメサユリ。姫早百合の字を当てるようです。オトメユリとも言われますが、新潟での呼び名はヒメサユリ一辺倒です。新潟県を中心に岩手県、福島県に分布します。本州西部から



九州に生えるササユリに近縁な種ですが、ヒメサユリの花粉は黄色ですので、ササユリの赤褐色と簡単に区別できます。山野草として販売されている株は弱々しくて、清楚な感じがしますが、写真のように自生の個体は、株も花も立派です。高城では最近、未熟の果実をサルが食ってしまう被害が出ています。

次は私の専門のツツジの仲間。咲きはじめてオオコメツツジを載せようかと思いましたが、大した花ではないのでスキップして、ツツジ科ヨウラクツツジ属のガクウラジロヨウラクを載せました。北海道、東北、中部に分布するウラジロヨウラクの変種で、萼が非常に長いのが特徴です。この個体は花色が特に濃かったので撮影しました。

最後の写真は日本海側に自生するホナガクマヤナギ。太平洋側にはクマヤナギが生えています。果実が熟しはじめて、さまざまな色に変化してきれいでした。





新潟を中心に分布するヒメサユリ



ウラジロヨウラクに比べて萼が非常に長いガクウラジロヨウラク



クロウメモドキ科のホナガクマヤナギ





# 新説！セイシカの名の由来 1

園芸日記担当の倉重です。まずは近況報告をば。

ちょうど8月18日から高知県立牧野植物園に行ってきました。一泊して19日に帰るはずでしたが、高知を直撃している台風のために飛行機が飛ばず、もう一泊して20日に帰りました。商店街の店もみな閉まっています、夕飯はコンビニで買いました。

そんなことはどうでも良いのですが、20日には当園の植物と食文化講座「摘み草料理」があって、野草を食べる文化や歴史について私が話をする事になっていたのですが、これに出られないのはまずかった！前日に高知から電話で担当Nに代わりに話をしてもらおうようお願いしたのですが、パワポ(パワーポイントの略、プレゼンテーション用のコンピューターソフト)の内容を説明しながら、ちょっと汗が出ました。頼まれた担当Nも困ったでしょうね。

12日は魚沼市の自然環境保全委員会に出席しました。魚沼市では4月に生物多様性シンポジウムを開催し、その後13か所で植物の調査をはじめています。委員会開催の時点ですでに60回もの調査が行われ、記録された膨大なリストと標本を拝見しました。調査リーダーとお話しましたが、みなさん本当に熱心です。美しい自然の残る魚沼市へ皆さんもどうぞ。



## セイシカは聖紫花なのか？

植物園では、園芸相談を受け付けていますが、時々面白い質問があります。今回はそんな中から、セイシカの名の由来について書こうと思います。これまで、特に考えたこともありませんでしたが、以下のセイシカの名の由来に関する推論は案外本当かもしれません。これまで誰も考察していないと思いますので、これは必読です。

セイシカと言っても、ご存じの方は少ないと思います。ツツジ属の木本で、一番の特徴は、花芽が枝の腋<sup>わき</sup>につく(他のツツジ属は花芽は枝の先端につく)ことで、シャクナゲでもツツジでもないセイシカ亜属のグループに分類しています。

日本には奄美大島にアマミセイシカ、沖縄本島以西、西表島や石垣島にセイシカが分布します。生態的な特徴としては、川沿いに生えることがあげられます。船で川を下ると、時期にはセイシカの花が見られます。写真は当園で開花していた中国産のセイシカの花です。

本文に関係ありませんが、次の写真は園内に涼しげに咲いているセイヨウニンジンボク、と自生のヤマブキショウマです。

本題に入る前に文字数がいっぱいになりましたので、次回に続く。





ツツジ属のセイシカは分布が広く、日本から中国雲南省あたりまで自生する。これは中国雲南省で採集されたセイシカ



ヤマブキショウマはバラ科の多年草。同じ「ショウマ」だが、学名でアステルベトと呼ばれることもあるアカショウマなどチダケサシの仲間はユキノシタ科



青い花が魅力的なセイヨウニンジンボク。生長が早く、育てやすい

## 新説！セイシカの名の由来 2



園芸日記の電子書籍化のためにiPadを購入した倉重です。8月上旬には発行できると思いますので、お楽しみに！さて、今回はセイシカの名前の由来の続きです。

7月26日

今日の話62

### セイシカは聖紫花なのか？

さて「セイシカ」と言う名の音は変わっていますね。聞いただけでは、どんな意味なのか分かりません。図鑑を見ると、みな「聖紫花」の字を当てています。樹木大図譜(1975 上原敬二)には、「せいしくわ、明治15年に八重山列島で発見」とあり、他の名前としてヤヘヤマセイシクワ、クルマツツジがあげられています。音で聞いて分かりにくい名前は、近代以降のものでしょうし、この文章からも明治に発見されたことが分かります。地元の人には当然知っていたと思いますので、古い名前はどうして「日本植物方言集成」(2001 八坂書房編)を調べると、奄美大島の地方名「やまざくら」があげられていました。

さて、そのセイシカですが、牧野富太郎先生の「日本植物志 圖篇」に和名について「八重山列島所産ノ品ヲ以テ花戸ノ所謂聖紫花ト」と述べられています。内容はほぼ同じなのですが、もう少し詳しい記事が先生の「日本産ノつつじ並ニしゃくなげノ類」にありました。「田代安定氏ハ明治十八年八重山列島中西表島ノ深山中ニテ始メテ本種ヲ見出サレタガ當時同氏ハ之ヲ東京ノ花戸ニ培養スル所謂せいしくわト別ノ種類デナイカト



考ヘラレ因テヤヘヤませいしくわト新稱シタガ、」とあることから明治時代に花卉生産者によって「セイシカ」と呼ばれていたことが分かります。蛇足ですが、花戸は「かこ」と読み、花の生産者の意味です。セイシカが生産者のつけた名だとしたら、もともとは聖紫花の字を当てたのではなく、妙なる美しい花の意味を込めて、中国四大美女、春秋時代の「西施」の花だったのかもしれない。

園芸相談に電話をかけてこられた方は、セイシカは西施の花じゃないのかと質問されたのですが、植物にも古典にも詳しい方がいるものだと感心しました。明治時代のカタログでもあれば分かるのですが、手持ちの資料で調べてみた結果が以上です。う～ん、これが正解かなと思いました。

### 後から長い一言

グレープさんからのコメントで、ネットでは中国名が西施花と出ていると情報をいただきました。全然知りませんでした。中国の方が古いとなると新説でもなんでもないので、和名が中国へ逆輸入された可能性もありますので、いろいろと調べてみた結果を8月16日の植物園日記に「セイシカの秘密3」として取り上げました。





中国雲南省のセイシカ



ツツジ属では普通、花芽は枝先に1つ  
つくが、セイシカは枝の腋に複数がつく



奄美大島の固有種アマミセイシカ

# 高城山の夏の花



7月28日

トンボの幼虫をヤゴって呼ぶのに、なんでセミの幼虫に名前がないのか不思議に思っている植物園日記担当の倉重です。新潟出身の担当Nに聞いてみたら、「セミの抜け殻をモズの抜け殻って言うんで、幼虫はモズじゃないですかね」と教えてくれました。しかし、他の人は「そんなの知らない!」。もしかしたら超ローカルな表現なのかもしれません。

さて、週末に高城山へ行ってきました。今年はこれで3度目です。今回は「ただ郷自然くらぶ」の観察会と植物ガイドブック制作のお手伝いです。

## 今日の話題63

### オオカメノキの葉も食べていた

お盆(旧盆)前は花の端境期ですが、今回の高城山で一番目立っていたのがリョウブでした。穂咲きの白い花を咲かせる落葉樹で、新芽の赤色や樹皮がきれいなので最近庭植えにもされます。昔は若芽を保存して、飯の増量材(糧)として使用しました(食べたことはないのですが、本にはそう書いてあります)。

次はツツジの中では超晩生のオオコメツツジ。ヤマツツジの仲間で、ごく小さな白い花を咲かせる風変わりなツツジです。花が白くて米粒みたいに小さいので、米躰かてなんでしょうね。「大」がつくので、コメツツジよりも花も葉も大きく、写真でお分かりになるでしょうか?葉の中央脈とそこから分かれる2本の



支脈、合計3本が特に目立つのが特徴です。

最後はガマズミの仲間のオオカメノキ。新潟には普通に見られます。5月に花が終わると、すぐに赤い実がなり、もう少しすると熟して黒色に変化します。紅葉もきれいです。新潟県内の江戸時代の記録を調べていたら、この葉も飯の糧として利用していたことが分かりました。その他にも、ナナカマド、オオウバユリ、カタクリ、ウワバミソウなどの葉は菜として利用されていました。結構いろいろ食べていたんですね。

### 後から長い一言

新潟市にお住まいのhanuraさんからは、セミの幼虫（の抜け殻）を「モゾ」と言うとの情報をいただきました。他の職員にも聞いてみましたところ、大御所から、「モゾかモゾだな」とありましたので、この地域ではこんな名前と呼ばれるようですね。

リョウブは庭に植えられることもありますが、日本のリョウブだけではなく、アメリカ原産で、樹高2mほどにしかならないアメリカリョウブも栽培されます。野生種の花は白か薄いピンクですが、みんなの趣味の園芸のショッピングのページでも紹介されていた園芸品種のように、きれいな紅の花色もあります。



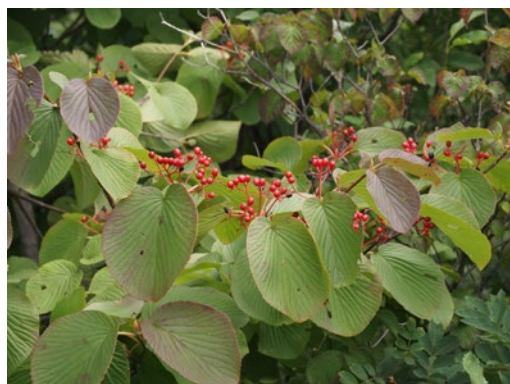




リョウブ



オオコメツツジ



オオカメノキ



## 納得！ユキヤナギの品種名

スマートフォンって便利ですね。ネット環境のない田舎に行くことが多いので、重宝します。私の買ったのはCPUがデュアルコア1.2GHz！信じられないようなすばらしいテクノロジーに感心しきりの植物園日記担当の倉重です。まあ私が信じなくても、動いているので特に問題はないんですが。

さて、花はどうに終わっていますが、今日はみんなの趣味の園芸の植物図鑑を書いている、ちょっと気になったユキヤナギの品種名についてです。

### 今日の話題64

## フジノ・ピンクかフジノ・ピンキーか

ユキヤナギの園芸品種にピンク色の花を咲かせるものがあります。園芸図鑑を書いている気になったのが、この品種名です。ある本には‘フジノ・ピンク’他の本には‘フジノ・ピンキー’とあります。どちらが正しいのでしょうか？ちょうど前に読み返していた「ガーデンライフ」(誠文堂新光社)の1989年4月号に参考になる記事があったのを思い出しました。

これはインタビュー記事で、タイトルは「育種三昧三十年 ついにピンクのユキヤナギを作出 浦和市の藤野花臣さん」。ピンクのユキヤナギ作出の経緯と苦労がまとめられています。その記事の内容は出版前に藤野さんもチェックされているでしょうから、内容に間違いのないと思いますが、そこには‘フジノ・ピンク’でも‘フジノ・ピンキー’でもなく、‘フジノピンク’とありまし



た。と言うことで、これが正解のようです。

藤野さんは、昭和30年ごろからユキヤナギの改良を手掛け、ピンクのユキヤナギ‘初恋’や‘初音’も作出されたとの由。記事によると‘フジノピンク’は1988年春に商社から内外に紹介されたとのこと。もう二十数年も経っているんですね。現在はいろいろなピンクの品種がありますが、先駆者としての藤野さんの業績は大きいと思います。

もう一つ、‘フジノピンク’やピンクのユキヤナギは、つぼみや咲きはじめに色が濃く、だんだんと薄くなると言うようなことが書いてあるのも気になりました。そう言えば言えないこともないんですが、実際のところは花卉の外側が紅ピンク、内側はほぼ白色なんですね。そのため、蕾の時は紅ピンク、開いた時は、内側の白色と蕾や外側の花卉の色が混じって全体的に薄いピンクに見えるんです。

### 後から長い一言

ピンクのユキヤナギは、‘フジノピンク’以外にも、品種名なしのものも多く販売されていますね。植物園の駐車場は‘フジノピンク’、宿根草花壇には‘ピンク・コアラ’（これは来歴不明の品種ですが、一時期販売されていました）が植えられています。

花の外側と内側で色が違う植物には、カルミアがありますね。金平糖のような形の蕾は濃いピンクですが、内側はごく薄いピンクです。





ユキヤナギ



ユキヤナギ‘フジノピンク’



満開時のユキヤナギと‘フジノピンク’



# みんな大好き笹だんご

緑のカーテン効果で、今年はゴーヤが生産過剰か？と言う記事はみませんね。「もらってもそんなに食えないゴーヤかな」、「赤にかわるゴーヤを見るぞ悲しき」と実感している植物園日記担当の倉重です。

今日は当園の「植物園だより」にも書きましたが、笹だんごについてちょっとした発見をしましたので報告します。暑いときこそ、笹だんご！いつもより粘っているようです。

## 今日の話題65

### 笹だんごの秘密

新潟では旧暦の端午の節句の6月5日には田植えなどの農繁期が終わることもあって、「晴れ食」の団子として笹だんごを食べます。柏餅のかわりですね。

つくり方は、うるち米ともち米の粉をこねて、この時期に香り高いヨモギを入れ、あんを包んで、俵型にします。ササの葉3枚で団子を巻いて、蒸し上げればできあがりです。

新潟に来た時に笹だんごがなぜつくられるようになったのか得心しました。葉の大きいチマキザサが普通にたくさん生えているのです。関東ではこんな大きな葉をもつササはクマザサくらいでしょうか。でも標高の高い場所にしか生えていませんね。身近に生える大葉のササを、物を包むのに使用したことはごく自然の成り行きだったのでしょうか。「越後名寄」(1756)にも「しの篠」の項に、「端午ノ粽ヲ包ミ、ちまき鮭おしずしノ蓋トシ」とありますので、



古くから利用されていたようです。

笹だんごは、新潟県内でも下越(村上市)から中越(柏崎市から十日町市)までの地域でつくられています。「新潟県植物分布図集3」(植物同好じねんじょ会)のチマキザサの分布図に「新潟の食事」(農文協)に示された笹だんごの南限ラインを重ねてみました。すると、ちょうどラインの東(北)側、チマキザサの分布が多い地域が笹だんごをつくる地域、分布の少ない西側がつからない地域となることが分かりました。写真の黒丸がチマキザサの分布、赤線が笹だんごの南限ラインです。

食生活も植物の分布に密接に関係しているようです。素晴らしい発見！だと思いましたが、誰か他の人もとうに発見している可能性大ですね。

### 後から長い一言

新潟(上越地方)出身の先生から、ご指摘を受けました。私の早とちりがあったようで、冷や汗ものです。

上越では、6月の笹の葉が開くころに粽をつくるようですが、笹だんごをつくらないのは、チマキザサが生えていないからではなく、単に食文化の違いだろうとのこと。上越地域にも葉の大きなササは普通に生えているようで、私の引用した分布図にチマキザサが少ないのは調査がされないためだろうとの由。

もう一つ、下越の笹だんごは、餅についてチマキザサに挟んだ上越の笹餅と比較するのが、妥当ではないかとも指摘されました。

以上、訂正いたします。

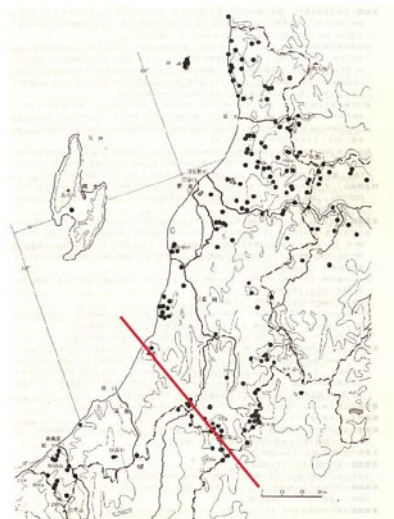




皆さんで納屋に集まって、笹だんごづくり



チマキザサは収穫して、洗った後に干される。立派な葉が選ばれていることが分かる



#### 笹だんごとチマキザサの分布

赤線より上(北)が笹だんごをつくる地域で、チマキザサが広く分布している。下はちまきをつくる地域で、チマキザサの分布は少ない

## セイシカの名の由来 3



2回に渡ってセイシカについて書きましたが、7月26日のグレープさんのコメントにあったように「西施花」をネットで検索するといくらでもヒットするんですね。そんなの全然知らなかった植物園日記担当の倉重です。

これじゃ、セイシカはもともと西施の花の字を当てたのではないかと私が言っているのは、新説でも何でもありません。と言うことで、アメリカ在住の中国人ツツジ研究家Shenさんの力を借りて、中国名と和名についてもう少し調べてみました。

### 今日の話題66

## 日本が先か中国が先か、それが問題だ

ネットで検索すると「西施花」は中国の名称だとあります。日本語の「聖紫花」と中国語の「西施花」、日本語の音は同じですので、両者は無関係ではないと思います。

中国の古い時代の資料がないので、アメリカにお住まいのShenさんに聞いてみました。Shenさんのお父様は中国のツツジの有名なコレクターで、ご自身も50年以上ツツジの研究を続け、「The Illustrated Encyclopedia of the World Famous Azaleas」等を出版されています。

さて、比較的新しい資料、1994年の「中国植物志」や「Flora of China」には、セイシカの漢名を西施花(xi shi hua)と書いています。「Rhododendrons of China」(1992)を見てみると、漢字表記はありませんが、Xishi Dujuanとありました。これは多





分、西施杜鵑と書くのだと思います。同じく西施の字を当てていますね。

もう少し古いところ、「Rhododendrons of China」(1980)を調べてみると、セイシカは鹿角杜鵑とあり、西施の字は出てきません。「華南杜鵑花誌」(1983)には岩杜鵑、大葉羊角とありました。中国は広いので、地域での呼び方もいろいろあるのでしょうが、見た限りではこの時代には西施花は用いられていないようです。

さて、手元にある乏しい資料から推測すると、1)セイシカは明治に花卉生産者がつけた名、2)漢字では聖紫花と書く(生産者はもともと西施花の字を当てたのではないかと私は推測)、3)(分類の改変や植物誌の編纂に伴い?)1990年代から中国では西施花と表記、4)時代から考えると、漢名は和名を参考にしたのではないかと推測します。

大したことも分かりませんでした、今回でこの話題は終了とします。

写真は本文と関係ありませんが、昨日の真つ暗闇ツアーの様子です。





セイシカの花。香りもある



昨夜の真っ暗闇ツアーの様子。  
ちょうど月下美人が咲いていた



ツアーの途中で  
台湾バナナの花を観察



# 電子書籍ができました！

苦節10年、いや日記を書きはじめで1年しか経っていないのに気づいた植物園日記担当の倉重です。

やっとできました！昨年8月から今年3月までの植物園日記58回分を電子書籍にまとめ、パブーで公開しました。これまで、コメントをくださった方、ご覧いただいた皆様に深く感謝申し上げます。また、松崎様をはじめとしたNHK出版の皆様には大変お世話になりました。

皆様からいただいた質問やコメントは、「後から長い一言」にまとめ、補足的な説明としました。また、コメントをくださった皆様のハンドルネームを巻末にあげさせていただきます。ご一読くだされば幸いに存じます。

「新潟県立植物園 みんなの趣味の園芸 植物園日記」

ダウンロード

<http://p.booklog.jp/book/32962>

コンピューターのディスプレイでもお読みになれますし、iPadなどのタブレット型コンピューターでは本物の本を読んでいるようです。スマートフォンでも読んでみましたが、これも快適です。通勤や通学途中のちょっとした合い間にもお楽しみいただけると思います。

今回の電子書籍では、全体のデザインや構成、目次から目的のページへのジャンプ、外部へのハイパーリンク等の機能の付加作業を斎藤恵子さんをお願いしました。また、表紙と月毎のイラストを中山典子さんをお願いしました。イラストは型染めの技法で描かれたものです。何ともいえない、ほんわかとし



た味わいがありますね。お二人とも新潟の方です。

好評であれば、来年度も電子書籍化を考えておりますので、皆様のダウンロードをお待ちしております。





## ちょっと興奮アサザの花

いつのまにか、もう9月。しかし今日も台風の影響か蒸し暑いですね。

さて、8月19日に環境省が進めている絶滅危惧植物保全のモデル事業、野生では絶滅したコシガヤホシクサの野生復帰合同検討会議に出席してきました。

8月28日には昨年に引き続き「十二潟観察会・学習会」に行ってきましたので、今回はそのお話を。

### 今日の話題67

## 比べてくださいアサザの花

アサザは環境省のレッドデータブックでは絶滅危惧種に指定されていましたが、各地での保全活動が功を奏して、2007年の見直しでサクラソウやサギソウと共に準絶滅危惧種にランクダウンしました。

さて十二潟のアサザですが、新潟大の学生さんの調査によって、すべてが等花柱花（雄しべと雌しべの長さが同じ）だったと調査会社の方からお聞きました。これは珍しいです！鼻血は出ませんでした、ちょっと興奮しました。

何が珍しいのかと言うと、アサザは株によって雌しべの長さが違うのが普通です（異型花柱性）。雄しべに対して雌しべが短いのを「短花柱花」、長いのを「長花柱花」といいますが、虫が花粉を運んで雌しべが短い花と長い花が交配するとタネができます。長と長、短と短ではタネはつきにくいようです。



しかし、アサザは根(匍匐茎:ストロン)でふえますので、大きな池にたくさん生えているように見えても、実は一株であることがあります。これですと花柱も1タイプしかありませんので、タネはできません。日本の自生地を調べると、たくさん生えていても1株である場所が多いようですので、数はあっても多様性は非常に低いのが現状です。

さて、十二漕のアサザは等花柱花と書きましたが、これは突然変異で現れるそうで、何と！自分の花粉でタネをつけるようです。もし、実生でふえていれば、雌しべが長いのと短いのが混じると思うのですが、等花柱花しか生えていないのであれば、現在は1株である可能性が高いと思われます。

聞くところによると、タネはできているそうです。アサザのタネは水に浮かび、水面を漂って、岸に流れ着きます。タネは水中では発芽しないので、田んぼに水を引くために漕の水位が下がる春5月に発芽します。その後水位が上がると、水の中に根を伸ばし、匍匐茎を伸ばして水中に移動していきます。

そこで、実生をさがしてみると、水がしみ出ている岸辺にごく小さいのを発見！しかし、等花柱花しかないとなれば、毎年芽は出ても水中にうまく根を伸ばせないで枯れてしまっているということだと思います。実生が育てばアサザの多様性も回復すると思いますので、引き続き観察していこうと思っています。



## 後から長い一言

説明が分かりにくかったかもしれません。要は、雌しべの長さが違う株がないと、アサザはタネができにくいのですが、十二潟で雄しべと雌しべの長さが同じでタネができる突然変異株が生えていたということです。

生物には多様性が必要なわけですが、現在のアサザの状況は、人間で例えると、自分の分身だけがたくさんいるけど、他人は誰もいない、子供もできないような状態です。その人が特定の病気に弱い場合など、一気に死に絶えてしまうことがあります。ですので、タネで子供をふやして、多様性を高める必要があるんですね。





アサザの花は朝開き、午後にはしぼむ  
一日花



十二潟のアサザの花。中央の雌しべ  
の長さが雄しべの葯の長さとはほぼ同じ  
等花柱花



岸辺で見つけたアサザの実生



秋





## 琵琶湖周航の歌の謎

「時間が経つとふえないダウンロード、電子書籍はいとはかなき」。芸術の秋を実感している植物園日記担当の倉重です。そんなことよりも、「もう日記やめたんですか？」と言われるのが、いとかなしき。2か月近くもお休みしてしまいました。

歌にありますように今年3月までの植物園日記をまとめて電子書籍にしましたので、再度宣伝させていただきます。無料ですので、皆様のダウンロードをお待ちしております。

「新潟県立植物園 みんなの趣味の園芸 植物園日記」

ダウンロード

<http://p.booklog.jp/book/32962>

さて、企画展「宮沢賢治と吉田千秋 二人の植物学」のことを書こうと思っていたのですが、11月13日に展示が終わってしまいました。今日はお越しいただけなかった方に、吉田千秋をご紹介しますと思います。

### 今日の話題68

## 吉田千秋とは誰か

「琵琶湖周航の歌」は、大正6年頃につくられた旧制三高（旧制第三校等学校：京都大学の前身）のボート部の歌ですが、「嗚呼玉杯に花うけて」など、旧制高校の寮歌は、かつては一般の方にも愛唱されていたようですね。その中でも「琵琶湖周航の歌」は、昭和46年に加藤登紀子さんが歌って大ヒットしました。若い人に聞いたら、知らなかったけれど、ある程度



以上の年齢の人はみなさんご存知でしょう。

このヒットを契機に、長らく三高出身の小口太郎の作詞作曲とされてきた「琵琶湖周航の歌」の作曲者は、以前から噂はあったそうなのですが、実は別人ではないかと三高卒業生の間で話題となったそうです。

そして、卒業生の堀氏が調査を進めた結果、昭和51年に吉田ちあき作曲の「ひつじぐさ」が掲載された「音楽界」(大正4年)を入手、「琵琶湖周航の歌」の原曲が「ひつじぐさ」であることが判明しました。昭和54年には、「睡蓮 吉田ちあき作歌」とある三高卒業生の手書きの譜面が見つかりました。それと共に、作曲者の本名は吉田千秋であり、大正4年に東京から新潟に移ったことも判明しました。しかし、吉田千秋がどんな人物なのかは長い間不明でした。

平成5年に新潟日報(新聞)に「琵琶湖周航の歌 作曲者の消息教えて 東京から本県に転居」と言う記事が掲載されました。この年は琵琶湖周航の歌が披露されて75周年に当たります。その記念事業が滋賀県高島市今津町で企画され、その一環として作曲者捜しが行われていたのです。

新潟ではちょうどその頃、早稲田大学教授で「日本地名大辞典」を著した吉田東伍博士(1864～1918)の企画展示が、故郷である新潟県阿賀野市で準備されていました。新聞記事が出た時に、家系図の作成も行われており、24歳で夭折した吉田博士の次男が「千秋」であることに気づいた関係者がいました。最初は「そういえば、若くして亡くなった同姓同名の人がいたけど、偶然ってあるんだね」などと話していたそうですが、睡蓮をひつじぐさと呼んでいたことや、作曲をしていたことから本人である可能性が高いことが分かりました。その後、新



潟市秋葉区の自宅で遺品を整理したところ、自筆のひつじぐさの歌詞や「音楽会」の掲載誌など数々の資料が発見され、当時存命だった東伍博士の三男の吉田冬蔵さんによって「琵琶湖周航の歌」の原曲「ひつじぐさ」の作曲者が吉田家の千秋であることが確認されました。

こんな偶然が重なって、幻であった「琵琶湖周航の歌」の作曲者が判明したのです。

吉田千秋は、音楽だけではなく、植物や園芸、言語、ローマ字、動物学、幅広い興味を持っていた人物であったことが分かってきました。

なぜ、昔の話なのに、いろいろなことが分かったかと言いますと、吉田家に千秋が書き残した回覧誌やその他資料が大量に残っていたためです。

植物に関する資料を調べたところ、チューリップ球根の商業栽培(新潟県が日本初)について面白いことが分かりました。次回の続きをお楽しみに。

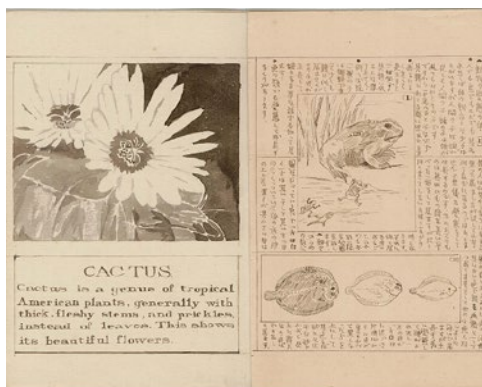




「ひつじぐさ」が掲載された大正5年の「音楽界」



吉田千秋がつくっていた家族の向けの回覧誌「SHONEN」190号(1910年6月10日刊 千秋15歳)の表紙のゼラニウム



「SHONEN」200号(同年11月17日刊)のサボテンの英文記事。植物に興味があったことをうかがわせる



## 琵琶湖周航の歌の謎 2

先日久々に更新した植物園日記に皆さんから早速コメントを頂戴しました。ありがとうございます！2ヶ月半も書いていなかったの、やっぱり、もうやめたと思われていたようですね。やっているような、いないような、でもやめない。植物園日記担当の倉重と植物の関係はこんな感じですので、末永くおつきあいください。そう言えば、熱帯産の首の長いカメなど数匹を20年以上飼っていますが、それもたいして面倒も見ないし、かわいがりもせず、でもいないとさびしいような、つかず離れずな感じです。

さて今日は、先回の吉田千秋のお話の続きです。タイトルとは違って、「琵琶湖周航の歌」についてではなく、その原曲「ひつじぐさ」の作曲者である吉田千秋の資料から判明したチューリップ栽培の歴史についてまとめました。

### 今日の話題69

## 吉田千秋とチューリップ 日本初の球根の商業生産はいつ？

平成5年に吉田千秋が世に知られるようになってから、吉田千秋の遺品の中に植物に関する資料が多数あることが分かってきました。そこで、平成15年から吉田文庫(吉田家の資料を保存している千秋の生家)の協力のもと、調査を行いました。

吉田千秋は明治28年生まれ、大正8年に24歳で亡くなって



います。

千秋は幼少時から生家の新潟と両親の住まう東京を行き来していましたが、結核の病状が思わしくなくなった大正4年6月、療養のために新潟市秋葉区に帰ります。翌年10月には、先回ご紹介した「SHONEN」にかわり、友人や兄弟と一緒に回覧誌「AKEBONO」をつくりはじめます。植物に関する記事も多いのですが、詳細は拙著「吉田千秋研究 I 吉田千秋と植物」をお読みいただくことにして、今回はチューリップについてのみ書くことにします。

調査を進めると、チューリップに関して重要な資料が3つあることが分かりました。

1つは、千秋がつくったチューリップの目録「CATALOGUS TULIPARUM 1917」(チューリップ目録 1917)と「CATALOGUS TULIPARUM FORMOSANUM 1917」(美しいチューリップの目録 1917)。2つ合わせて72品種の品種名や花の特徴がまとめられ、それぞれに千秋自身がつけた名前も記されています。

2つ目は、「AKEBONO」のチューリップの写生画。絵には番号が振られています。

最後が園芸日誌。「AKEBONO」16号(大正6年5月刊)には、大正5年の園芸作業日誌「花つくりの手控より(1916年)」、以下37号(大正7年4月刊)には大正6年分の「花つくり日誌(1917年度)」、また大正7年分の園芸日誌の草稿が見つかっています。

さて、これらを調べると、チューリップの目録に振られた番号が、「AKEBONO」の絵の番号と一致することが分かりました。



また、園芸日誌を確認すると、72品種すべてが、いつ、どこで購入したかが記録されていました。

その結果、1～70番までは新潟市秋葉区の生産者のもとへ直接出向いてチューリップを購入していること、その時期は大正5年5月26日から大正7年5月28日までであることが分かりました。

資料をまとめている時点で、これは！と思いました。それは、日本ではじめてのチューリップ球根の商業生産は、新潟県秋葉区で大正8年にはじまったとされていたからです。偶然にも、千秋はそれよりも前に球根の栽培がはじまっていたことを記録していたのです！

園芸日誌にはこの他にも、大正6年5月1日「午後S君と出戸（でと：秋葉区の地名で、江戸時代から花が生産されている地域）へ行く。至る所の花戸（かこ：花生産者）、ハイアシンス（ヒアシンスの英語読み。昔はこう呼ばれた）、早咲のテウリップ、アネモネなど盛りなり」と、一軒だけではなく、地域である程度の規模でチューリップが栽培されていたことも記されていました。これで、定説よりもチューリップ栽培は古くから行われていたことが明らかになりました。それをまとめて平成15年12月に新潟日報に「定説よりも早かったチューリップの商業生産」（確かこんなタイトルでした）と言う記事を掲載してもらいました。

吉田文庫での調査後に、たびたび名が出てくる秋葉区のプロダクションのところにでも出向いてみました。現在は廃業していますが、なんと！吉田千秋が通った大正7年の売買帳が残っていました。早速拝見すると、大正7年4月21日「チューリップ十一株 大鹿（千秋の生家のある秋葉区の町名）吉田ト沢田」など、千

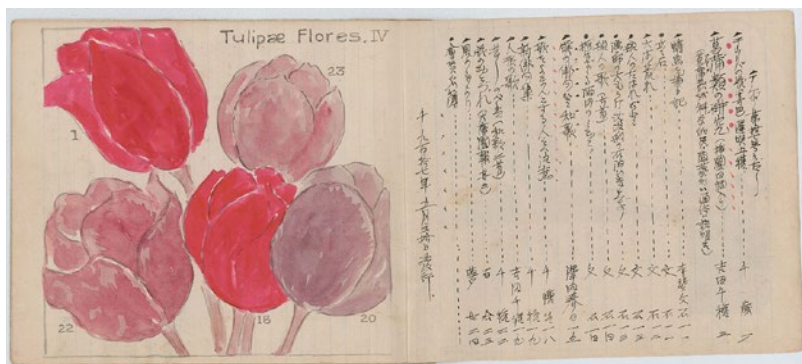




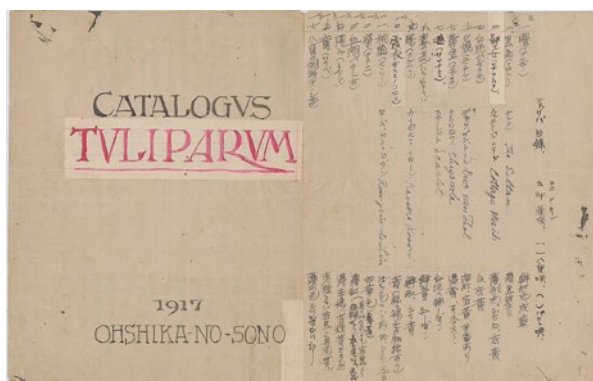
秋の園芸日誌と帳面の記録がぴったりと一致しました。また、このお宅には大正7年5月に撮影されたチューリップ畑(生産圃場)の写真も残されていました。さらに別のお宅で見つけた「球根類ひかえちよう扣帳 大正八年二月吉日」には、178ものチューリップの品種が記録されていました。

以上、吉田千秋の遺品の調査から、定説の大正8年よりも前に、日本初のチューリップの球根生産がはじまっていたことが判明したお話でした。何でも記録は取っておくものですね。でもこの調査は楽しかったな～。

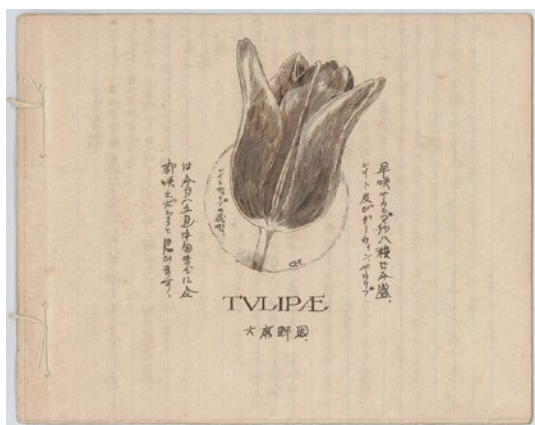




「AKEBONO」17号(大正6年6月)のチューリップの絵。吉田千秋が自分で栽培して咲かせた花を写生した



チューリップの目録「CATALOGVS TVLIPARVM 1917」



「AKEBONO」39号(大正7年)裏表紙のチューリップ



# ドイツで見た植物 1

本当に2ヶ月も「みんなの趣味の園芸」を見ていませんでした。NHK出版の松崎さんに本文1000文字では少ないと言っていたら、文字数の制限はなくなりましたし、写真の投稿やアルバムもつくれたり、どんどん進化していますね。驚きの多機能ですが、あんまり久しぶりなので、先回投稿しようとした時に、パスワードも忘れていた植物園日記担当の倉重です。

さて、休暇で9月末から10月にドイツのマインツに行ってきました。

ドイツといえば、ビール！安いのだと500ml缶が20円くらいです。飲みませんので、関係なし。スーパーでは店内で飲んで、空き缶で清算する豪傑も！さすがドイツ。

水も安い。特に「Ja！」と言う格安のメーカーは1.5リットルで20円。でも容器のデポジット料金が25円。

それとソーセージ！胃が悪いのでそんなに食べませんでした。

それとディベアの元祖スタイフ(Steiff)！これはかわいい。

そしてパン！友人からドイツパン食べて来てくださいと言われましたが、ドイツパンがいかなるものかも分からず、帰って来てからも分からなかったと言う有様です。ドイツで売っているパンのことでしょうか。

市内のパン屋で見た衝撃の光景(写真参照)。ミツバチが蜜を集めるのは花の多い春だけかと思っていましたが、秋にも飛んでいて、花の蜜がないので、甘いパンのショーケースの中にウジャウジャ集まっていました。誰も気にしていませんでしたが、刺されないのか、パンの袋の中にハチが入らないのかなと思いましたね。私も気にせず写真の左側のおいしいパンを



買いました。

そして、やっぱり植物！今日から何回かに分けてドイツで見た植物をご紹介します。

## 今日の話題70

### トチノキはマロニエで食えない

「いやー、こっちはクリがいっぱい落ちてるんだけど、誰も拾わないんだよ」とはドイツにいる子供とスカイプをした時の話。「こんなに拾ったんだけど、栗ご飯にしようと思ってさ」。関係ないけれど、スカイプは実に便利ですね。

ここで、「ドイツのクリは、ヨーロッパグリ(カスタネア・サティヴァ *Castanea sativa*)で、カスタネアは楽器のカスタネットの語源、サティヴァは食えると言う意味だとか、ヨーロッパグリは渋皮がむきやすいんで、マロングラッセをつくるんだ。だんだん糖度の高い砂糖水で煮てな」とか、そんなことを私から説明しました。多分、こういうねちねちとした説明が子供に嫌がられるんでしょうね。

そして、ドイツに行った時に実際にクリを拾ったと言う場所に行ってみました。あるある！いが(刺)のないトチノキの実がゴロゴロ落ちています。セイヨウトチノキの実です。確かに丸々としたクリに見えます。

「トチノキだよこれは。食えるけど、アクを抜くのが大変だぞ」と聞いた子供は寮に帰って全部捨てたそうです。



ドイツには街路樹や公園にたくさんのトチノキが植えられていました。もう落葉期でしたが、日本でマロニエ(フランス語)と呼ばれるセイヨウトチノキ(*Aesculus hippocastanum*)だと思います。大きな円錐形の花序につく白い花が印象的な花木です。剪定されずにのびのびと育っていますので、横枝も十分に張り、見事でした。

その他に良く植えられていたのが、ナナカマドの仲間です。ちょうど果実が赤くなって非常にきれいでした。夏の涼しいヨーロッパではこの仲間をよく見かけますね。

ナナカマドには、単葉(日本のアズキナシやウラジロノキ)と複葉(ナナカマド)の種類があり、知らないと同じ仲間とは思えません。ドイツでは単葉の種類、多分、ソルブス・アリア(*Sorbus aria*)が植えられていました。

その他にも、最近プライベートの名で生垣用に販売されているセイヨウイボタノキ(*Ligustrum sinense*)、ヘイゼルナッツと呼ばれて果実が食用にされるセイヨウハシバミ(*Corylus avellana*)、カシワのように大きく、切れ込みの深い葉のヨーロッパナラ(*Quercus robur*)なども見られました。

街路樹や公園に植えられている木を見るだけでも、日本と違って楽しいですね。





衝撃！甘いパンにミツバチがたかっている



子供がクリと間違えて拾ったマロニエ(セイヨウトチノキ)の実



単葉のナナカマド、  
アリア (*Sorbus aria*)



## ドイツで見た植物 2

11月30日

こんにちは。植物園日記担当の倉重です。

ライン川をはさんで、フランクフルトの西側にマインツと言う町があります。今回の旅行では、ずっとそこに滞在していました。

今日は、マインツ大学附属植物園で見た植物を紹介します。小さい植物園なのですが、コレクションは大変充実していました。また、きれいに管理されて、すがすがしく感じました。

今日の話題71

### 乾燥地の植物

乾燥地の植物を英語でゼロファイト(Xerophyte)と言います。余談ですが、コピー機の会社のゼロックス(Xerox)は乾燥したと言う意味で、乾式のコピーに由来するんでしょうね。

乾燥地の植物が植えられている小さな温室には、写真のオトギリソウの仲間のヒペリカム・バレアリカム(*Hypericum balearicum*)が開花していました。スペインのバレアレス諸島に特産する常緑性の木本です。厚くて、よじれたような、細長い葉が印象的です。葉と茎にイボのような突起があるのは本種だけのようです。オトギリソウの仲間には、400種もあるそうですが、花は黄色で皆同じようですね。

また話がそれますが、科の学名はceaeで終わるものがほとんどです。ツツジ科 Ericaceae、ユリ科 Liliaceaeなどです。これ以外に、オトギリソウ科 Guttiferae、その他にもキク科 Compositae、イネ科 Graminae、シソ科 Labiatae、アブラナ科



Cruciferaeなど、語尾がceaeでないものがあります(現在はキク科がAsteraceaeなどceaeで終わるように表記される)。これらは、人間の生活に深く関わった植物で、古い時代の表記がそのまま使われてきたと聞いたことがあります。

次はフウチョウボク(フウチョウソウ)科のカップリス・スピノーサのとげのない亜種ルペストリス(*Capparis spinosa* ssp. *rupes-tris*)。地中海からインドに分布する常緑の木本です。紫色の雄しべと花の白色の対比が鮮やかですね。1日花ですが、次々と開花していました。「世界有用植物辞典」によれば、蕾(ケーパーと呼ばれる)に淡い香辛味があり、塩と酢でピクルスにし、これを芯にして、アンチョビで巻いた油漬けが有名であるとあります。そう言われれば、瓶詰めを見たことがあるような気がします。

これは隣のサボテン温室でしたが、ちょうどサボテン科のモクキリン(ペレスキア・アクレアタ *Pereskia aculeata*)が満開でした。5~6mも茎が伸びて、無数はオーバーですが、数百の花を咲かせていました。サボテンなのに葉があるのも不思議な感じですね。日本で見るのよりも、ずいぶん花が大きい感じがしました。

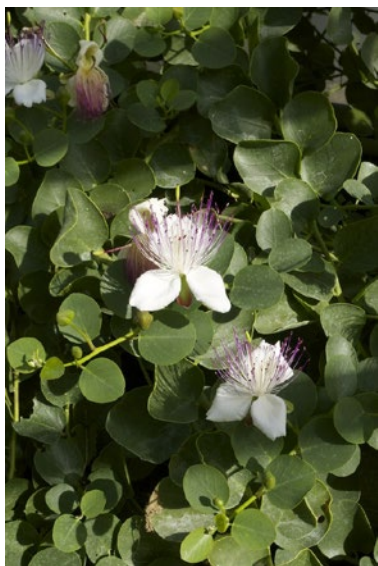
温室中に甘くスパイシーなおい(あまり良いにおいではない)が充満して、たくさんのハチが花に集まっていました。ちょっと緑がかった花(外花被)といい、まるで人工物のような感じの花です。







オトギリソウの仲間のヒペリクム・バレア  
リクム(*Hypericum balearicum*)はスペ  
インのバレアレス諸島の特産



フウチョウボク(フウチョウソウ)科の  
カッパーリス・スピノーサは一日花



人工物のような質感のサボテン科のモクキリン  
(ペレスキア・アクレアタ *Pereskia aculeata*)



## ドイツで見た植物 3

ドイツで見た植物の最終回。今回もマインツ大学附属植物園で見た植物です。これは書き下ろしだから、写真を4枚入れました。

なぜか、ドイツにいる子供は大学を見に行った時に、バドミントンの道具を持って来ていました。長旅で疲れているのに、訳も分からずにキャンパスでバドミントンをしました。

帰る日は寮から大学まで田園風景の美しい道を散歩しました。ローマ時代の上水道の遺跡あり、ヒツジのようなそうでないような動物がいたりして楽しい時間でしたが、遊歩道の終点に卓球台があり、そこで子供と勝負してきました。暑くてシャツを脱ぎ、最後は上半身はだかになりました。

マインツ市郊外のホテルの近くには木々に囲まれた遊歩道が近くにあったので、毎日のように散歩をしました。植えられているのはヨーロッパ原産種ではないものも多いので、つくられた林だと分かりますが、まるで自然のように見えます。

歩いていると、脇道らしきものがありました。物見高いので、そこを進むと、粗末な柵とその奥に掘建て小屋らしきものが。のぞいていると、ひげのおじさんがぬっと現れて、「コンニチハ」。ちょっと驚きましたが、世間話をしてきました。ホテルの部屋からも林の中のおじさんの小屋あたりが見えるのですが、夕方に見てみると、煙が上がっていたので、ああ夕食の時間なんだと思いながら眺めていました。ドイツには楽しい遊歩道がたくさんあって良いですね。

特にどこに行くこともなく、こんな感じで毎日街や郊外、大学を散歩してドイツ滞在を満喫してきました。

## ドイツで見た植物いろいろ

それでは、マインツ大学附属植物園で見た珍しい植物をいくつか紹介しましょう。



多肉植物ファンはご存知の方がいらっしゃると思います。知らないだけかもしれませんが、日本でこんなに大きく育った株を見たことがありません。食虫植物のウツボカズラのように見えますが、ガガイモ科の多年草です。アフリカ南部(ケープ)原産。

ケロペギア・アンプリアータ  
*Ceropegia ampliata*





これは珍しい！見たことのある人は少ないと思います。

世界最小のスイレン。1987年にドイツの植物学者によってルワンダで発見されましたが、残念なことに野生では絶滅しました。ドイツの植物園とイギリスの王立キュー植物園 (Royal Botanic Gardens, Kew) でしか栽培されていません。

スイレン属テルマルム

*Nymphaea thermarum*



熱帯に行くと、時々背丈以上もある巨大なツククサ科の植物を見かけることがありますが、これもその仲間です。

葉は1m以上になって、まるでパイナップルの様。美しい紫色の花を咲かせていました。良い香りがします。南米原産です。

コクリオステマ・オドラチシムム

*Cochliostema odoratissimum*



日本でもブルーエンジェルトランペットの名で販売されるようになりました。ナス科の低木で、ごく小さな藤紫色のベル状の花を咲かせます。南米原産。園芸品種には花が大きくて、花つきの良いものがあります。

イオクロマ・キアネウム  
*Lochroma cyaneum*

以上、ドイツで見た植物をご紹介します。植物って本当に多様で、面白いですね。





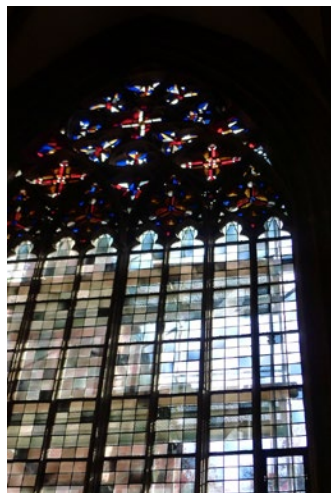
## マインツ旅行アルバム 1



マインツ大学の校舎  
正式名はヨハネス・グーテンベルグ大学マインツで、  
1477年の設立

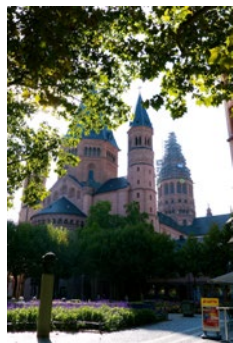


マインツ市街の古本  
屋 子供に値切らせて  
、ポタニカルアート  
を数枚購入



マインツ大聖堂のステンドグラス  
微妙に歪んだガラスの表面が美しい

ヴィースバーデン美術館 床に凸面鏡が置いてあって、  
天井が写っている



マインツ大聖堂をライン  
川側から見る。あまりに  
も巨大で、複雑な建築な  
ので、見る場所によって  
印象が全く異なる



ドイツ人はグミが好き。ビールのは、白いネズミの形のグミ。なかなか良い趣味



マインツ大学の学食 味はともかく、量はすごかった。子供はJail foodと呼んでいた



ミズキの仲間の灌木、コルヌス・アルバ 落葉期の赤い枝も美しい。植物園でも栽培しているが結実しないのはなんでだろう



ライン川 ワグナーのラインの黄金を思い出した



シャガールのステンドグラスで有名なザンクト・シュテファン教会の庭 葉色のコンビネーションがすばらしい



冬







## どんぐりの根

大変遅ればせながら、明けましておめでとうございます。本年もよろしくおつき合いますよう、お願い申し上げます。

12月も園芸日記をとうとう1つも書きませんでした。昨年に比べるとだいぶ低い目標ですが、月に2回以上日記を書く、これを年頭の誓いとした植物園日記担当の倉重です。

さて、12月中旬に、京都府立植物園と宇治市植物公園に行ってきました。今年は2月29日(水)から3月4日(日)まで、京都府立植物園で「古都ゆかりの花 のとキシマツツジ展」、最終日に「のとキシマツツジシンポジウム～園芸文化の保護と育成～」が開催されます(私も講演します)。目も覚めるような深紅の花を咲かせる樹齢百年のキシマツツジの盆栽が展示されますので、是非ご覧ください。

昨年、高知へ行ったときには台風のため、予定日に帰れなかったのですが、今回は雪のため、大阪から新潟までの飛行機が欠航し、急遽新幹線で帰りましたが、新潟駅までにしかたどり着けず(新潟空港に車を置いていましたが、遅い時間だと駐車場から車が出せない)、新潟でもう一泊した次第です。

さて、それよりも前、12月上旬には、新宿に行ったのですが、あまりに久しぶりだったので道に迷って会議に遅れそうになりました。日本植物園協会の集まりだったのですが、渋谷区ふれあい植物センターの宮内さんにもお会いし、帰りにセンターをご案内いただきました。がんばっていますね、宮内さん！

## どんぐりの根

がんばっているといえば、コナラのどんぐり。今は雪に埋もれて見えませんが、落果してわりとすぐ、11月頃から根が伸びはじめています。

芽は春にならないと伸びてきませんが、根だけは秋のうちに伸びて、根が地面に届かないと、どんぐりは死んでしまいます。生死の分かれ目ですので、結構長く根が伸びているものもあります。親木のまわりには、たくさんどんぐりが落ちていますが、根が出ていないどんぐりは虫に食われて、腐っているものが多いようです。

今年は10月からコナラの枝先と一緒に未熟などんぐりが落ちていましたが、これはハイロチョッキリと言う虫の被害だそうです。当園のボランティアさんから教えてもらいました。

ハイロチョッキリは、どんぐりの帽子(殻斗<sup>かくだ</sup>)の部分からどんぐりの中に産卵し、次にそのどんぐりがついている枝を切り、地面に落とします。どんぐりの中身(子葉)を食べて幼虫が育つそうです。

コナラの親木のまわりには実生がたくさん育っていますが、観察すると大きなものでも3～4年生のものが多いようです。日がほとんど差さないので、育たずに枯れてしまうのだらうと思います。

コナラはたくさんどんぐりを落として、その中から根を伸ばしたものが生き残り、若木が育ち、大きくなれずに枯れると言うサイクルを繰り返しています。そして親の木が枯れたり、倒れ



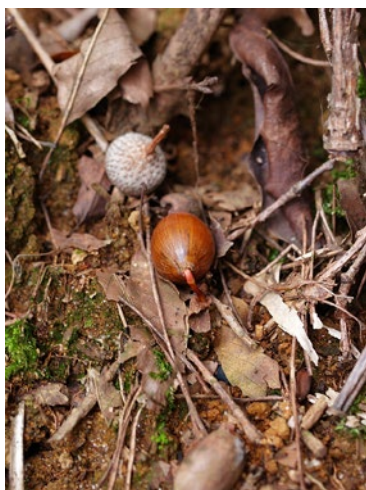
たりすると、若木の中から強いものが育って、次の世代の林をつくっていきます。万が一の時用に常に準備をしているのですね。

本題の方が短くなりましたが、今日はこの辺で。





親株の根元に大量に落ちている  
コナラのどんぐり



11月には根が伸びはじめる



土につくまでかなり長く根を伸ばす



# 大雪警報!!

いや～大雪です。警報が出ているのか分かりませんが、これを警報とせずに、何を警報とするのかと言うくらい積もっています。出勤前に自宅の駐車場の除雪をすること1時間、仕事の前に疲れ果てている植物園日記担当の倉重です。

私が新潟に来てから一晩で降った量としては最高だと思えます。新潟日報のニュースでは、「新潟市秋葉区でも午前10時までの24時間に36センチの雪が降った」とありますので、これまでに積もった分と合わせると、1m以上になると思えます。

広い道には消雪パイプ(こちらではショウパイと略すが、新潟に来たばかりのころは意味が分からなかった)があるし、除雪も優先的に行うので、そう問題はないのですが、家からそこにたどり着くまでが一苦勞です。写真は植物園とお隣の新津美術館の間の道で、除雪していない中を、誰かが歩いているところです。

日本一のアザレア展も明日で終了するのに、宣伝の日記も書かずにいるのですが、ツイッターで開花やイベント情報を随時更新しています。是非チェックしてみてください。写真つきですので、Twitpicなどでご覧になると、より楽しんでいただけたと思います。

Twitter [https://twitter.com/Niigata\\_BGarden](https://twitter.com/Niigata_BGarden)

Twitpic [http://twitpic.com/photos/Niigata\\_BGarden](http://twitpic.com/photos/Niigata_BGarden)

ツイッターの記事を書いている運営スタッフには「一日2記事くらいは書いてよね」と無理な注文をしています。自分では書かないのに、反省することしきりです。



さて、ドイツの植物の話も終わっていないのですが、これはちょっと後にして、今回は半落葉性について考えてみました。う～ん、あらためて考えてみれば、アベリアのように冬に半分葉が落ちるものだけではないんですね。本題の方が短くなるような気がします、はじめましょう。

### 今日の話題73

## ヤマツツジは半落葉

植物図鑑を見ると、この植物は常緑、半常緑、落葉性などと書いてあります。小生の専門のヤマツツジはどうかと思って、「日本の野生植物」(平凡社)を調べてみると、「半落葉低木」とあります。近い種類のサツキはというと、「半常緑低木」となっています。同じような意味のように思えますが、実際どういうことなのか、ちょっと整理してみましよう。

■「半常緑性」 基本的に常緑性であるが、一部の葉が落葉するもの。

サツキの葉は冬でも残るので常緑樹ですが、秋から冬にかけて一部の葉が黄色くなって落葉します。

■「半落葉性」 基本的に落葉性であるが、一部の葉が冬でも残るもの。

ヤマツツジの葉はほとんど秋に落ちますが、芽の周りだけは小さな葉が残って越冬します。



余談ですが、清水先生の「図説植物用語事典」(八坂書房) 23ページの半常緑樹の英語がhemideciduousと間違っ  
て表記されているのを見つけました。正しくは、semideciduousです。普通はsemiとdeciduousの間にハイフンを入れて、semi-deciduousと書くことが多いと思います。

さて、ヤマツツジの半落葉性についてもう少し、詳しく見ていきましょう。その前に秋に撮影したヤマツツジの葉の写真をご覧ください。黄葉しているのは、春に伸びた枝についている葉です。夏には枝の成長は止まり、枝の先端に花芽(または葉芽)をつくります。ちょうどそのころに、枝先の花芽をとり囲むような小さな葉が出てきます(夏葉)。この葉は越冬しますので、真冬でも枝先に小さな葉が集まっている木はヤマツツジだとすぐに分かります。このように、ヤマツツジは春と秋、一年に二回葉が出るんですね。こんな理由でヤマツツジは、半落葉性と書かれているわけです。

半常緑と半落葉について書かれたものはあまりないのではないかと思います、今回ヤマツツジを例にまとめてみました。「半」と言うのが、分かりにくいですね。「準」の方が適訳だと思います。

### 後から長い一言

半常緑性のアベリアの剪定について質問をいただきました。アベリアは、寒さに当たると、古い(下の方)葉が落ちてしまいます。また、年数が経った古い枝の葉も落ちてしまいます。



一度葉が落ちた枝(幹)には葉は出ませんので、新しい枝を出させる必要があります。

そのため、下葉が落ちた場合は、株の大きさにもよりますが、地際近く(鉢でしたら5cmくらいでしょうか)で切り戻して、新しい枝を出させます。切るのは、成長がはじまる春が良いと思います。ただ、‘コンフェッティ’は成長が遅いので、元の大きさに戻るのは時間がかかります。試しに一本切って、様子を見ると良いかもしれません。







除雪していない場所はこんなに雪が！



秋のヤマツツジ。  
春に出た黄色い葉は冬前に落葉する



落葉後のヤマツツジ。  
夏に花芽の周りが出る葉だけ越冬する



# 今年度の十大ニュースと クリスマスローズ

これが今年度最後の日記です。冬の分が少ないので、書きかけの原稿を完成させました。ここまでお読みくださった皆様、本当にありがとうございます。

毎年同じようなことをしているのですが、今年度の十大ニュースを発表します。個人的なことも入れています。

- ・京都府立植物園で調査をしているツツジの展示「のとキリシマツツジ展」とシンポジウムに協力。環境省新宿御苑、神奈川県立フラワーセンター大船植物園に続いて3回目
- ・企画展「宮沢賢治と吉田千秋 二人の植物学」を開催。良い展示だった
- ・3年をかけた新潟市東区の全小学校での絶滅危惧植物ミズアオイの講義と実習が終了
- ・地元の金津小学校と一年間の総合学習「守ろう！残そう！金津の自然」を行った
- ・秋のドイツ旅行
- ・電子書籍の出版
- ・ツイッターを開始
- ・スマートフォンを購入、その後iPhoneに変更し、お古は子供に。iPadで読めるように植物関連の参考書を自炊。

あ〜8個しか思い浮かびませんでした。以上。

## クリスマスローズのガーデンハイブリッドとは？ 学名の話

先日、新潟の月刊誌から新潟の花についてのインタビューを受けて、その校正をしていたところ、クリスマスローズとは何ぞやと言う説明がありました。「クリスマスローズとはヘレボルス属のガーデンハイブリッドの愛称」と書かれています。

ガーデンハイブリッドの意味が分かりませんでしたので、ネットで調べたところ、どうもイギリスのクリスマスローズの品種改良で有名なアッシュフォードナーセリーのアッシュフォードさんが、ご自分の交配種をガーデンハイブリッドと言う名称で販売していることに拠るようです。一般的な名称ではありませんので、念のため。

植物の科、属とかは分かりにくい概念ですよ。私が例として上げるのが、ランのイメージはラン科、その中のデンドロビウム、コチョウラン(ファレノプシス)、シンビジュームなどのイメージは属に当たると説明しています。

さて、植物の学名は世界共通で、一般的に属名と種名から構成されています。*Helleborous*ヘレボルス(属)・*niger*ニゲル(種)などです。属は日本の苗字に当たると言えば良いでしょう。人の場合は同じ苗字で赤の他人であることは間々あることですが、植物の場合は必ず親戚です。そのため、種名を知らなくても、属名のヘレボルスと聞けば、自分の知っている植物からこんなのかなと類推することができるのです。



種より下の分類単位には亜種、変種、品種があります。最後の「品種」は園芸品種ではなく、formaまたはf.と表記し、*Helleborus niger* f. *alba*のように使います。良く品種と略記される園芸品種(cultivar 植物学では栽培品種と言う)とは、Wikipediaにあるとおり「栽培品種とは、農業や園芸利用のためにつくられた(育種)、有用な形質を保持する品種のことである。」のことで、園芸品種名は国際的に‘ ’で囲む、例えば‘Noria Beauty’のように表記すると定められています。「交配種」も良く使われますが、園芸品種のうち、交配によってできたものをさしていますので、園芸品種よりも狭い意味になります。



この続きはこちらから

.....  
<http://www.shuminoengei.jp/?id=3078>

みんなの趣味の園芸 新潟県立植物園 植物園日記

パプーで公開している昨年度分の電子書籍、

「新潟県立植物園 みんなの趣味の園芸 植物園日記  
2010年8月～2011年3月」も合わせてご覧ください

<http://p.booklog.jp/book/32962>



ツイッターで開花やイベント情報をお知らせしています

[https://twitter.com/Niigata\\_BGarden](https://twitter.com/Niigata_BGarden)

---

## 最後の「後から長い一言」

早いもので、二冊目の植物園日記の電子書籍を出版することになりました。

昨年、はじめての電子書籍をつくるのにあたり、目標を500ダウンロードとしました。公開から3日間で一気に120ダウンロードもあり、その後もボチボチふえ続け、平成24年8月14日現在で639ダウンロードとなり、皆様のお蔭で大幅に目標を達成できました。幸い、タダだからそのくらいはいかなくちゃねとは誰にも言われませんでした。

さて、一昨年度は8月から3月までの8ヶ月に58回も記事を書いたのに、昨年は一年でその半分以下の24回、平均して月2回の更新になりました。しかし、電子書籍は本の厚みが分からない。怠けても分からないのが良いですね。今年度とは言うも、もっとペースが落ちていきます。また波に乗ることもあると思いますので、皆様の引き続きのご愛顧をお願い申し上げます。

そのかわりにとは言うてはなんですが、一つは、書き下ろしで、「ドイツで見た植物3」と「今年度の十大ニュースとクリスマスローズ」を加えました。もう一つは、日記にも書きましたが、即時的な情報提供の手段としてツイッターをはじめました。開花、イベント、教室等の情報を一日数回ツイートしています。こちらもぜひご覧ください。

電子書籍用のデバイスは、スマートフォンやiPadなどのタブレット型コンピューター以外にも、つい最近楽天からkobo Touchが販売され（私も買いました）、Amazonもkindleを近々発売すると宣伝しているように、急速に発展しています。これらの普及にともなってさらにこの日

---

記の読者が増えることを期待しています。

最後に「みんなの趣味の園芸」の記事をお読みくださった皆様、そして本書をダウンロードしてくださった皆様に厚く御礼申し上げます。また、みんなの趣味の園芸サイトを運営するNHK出版の松崎さんには貴重なご助言をいただきました。あわせてお礼申し上げます。

新潟県立植物園 園芸日記担当

倉重祐二

協力 みんなの趣味の園芸 (NHK出版)

<http://www.shuminoengei.jp/>

コメントをお寄せくださった皆様

BOB

C.パープラタ大好き

chackee

Chappy

coron

hanura

jardin

krshg,sh

michi

myoi2

miyoshi

okayann

SATO

ZESYOU

あお@岐阜県

おしゃれマン

グレープ

くじら

こころ

渋谷区ふれあい植物センター

ジャカランダ

ジュジュ

せいざえもん

なお

花好きかんちゃん

よっこら

ローズマリー





「新潟県立植物園

みんなの趣味の園芸 植物園日記2  
2011年4月～2012年3月」

2012年8月31日発行

著者 倉重祐二

発行者 新潟県立植物園

<http://botanical.greenery-niigata.or.jp/>

国際総合学園・都市緑花センターグループ

<http://www.greenery-niigata.or.jp/>

表紙・イラスト・レイアウトデザイン 中山典子